

受け入れ旅館・ホテル座談会

【出席者】

鳳明館（東京都・本郷）

社長 小池邦夫氏

志賀パレスホテル（長野県・志賀高原）

社長 斉須正男氏

加茂川館（京都府・三条大橋西詰）

社長 篠下 誠氏

稲佐山観光ホテル（長崎県・長崎市）

社長 小林秀顕氏

司会・観光経済新聞社 副編集長 板津昌義

中学校の一大行事である修学旅行は、生徒にとって一生の思い出になる。その修学旅行を成功させるために、受け入れ先の旅館・ホテルも陰ながら努力を重ねている。そこで、修学旅行をはじめとする教育旅行の受け入れに熱心な旅館・ホテルの方々にお集まりいただき、充実した受け入れサービスの実現に向けて意見を交わしていただいた。

（東京都台東区の観光経済新聞社本社で）

〇自身の地域と館について紹介してください。

小池 東京の中心、東京大学のある本郷地区で昔ながらの旅館を3軒経営している。二昔ぐらい前の本郷は東京でも一番の修学旅行のメッカで、それが後継者難や生活様式の変化、バブルによる地価高騰といった時代の変遷とその後長引く不況でどんどん軒数が減った。販売チャネルも団体から個人に変化し、大手旅行会社がバスを運んでまたいつの日かやってくるという根拠のない夢を見続けてきた旅館が廃業した。

最盛期には修学旅行を受ける団体旅館が40軒ぐらいあったが、今は私の組合加盟ではレジャー、公的施設を除くと3軒5軒になった。

当館は、成元年に売り上げの60%が修学旅行だったのだが、今では15、20%程度になってきているという状態だ。

〇志賀高原の標高は7000メートルと聞いている。志賀高原は国立公園特別地域で民家は1軒もない。許可されているのはホテルと索道だけだ。

本日は自然と出会う場所として、修学旅行の皆さんも来てくれる。素晴らしい雪が降っているのを待ってスキー修学旅行が多い。現在、売り上げのうち修学旅行は70、80%を占める。

篠下 京都府ホテル旅館生活衛生同業組合の中に「教育旅行部会」があり、昨年度からその部会長をしている。

京都の中学校の修学旅行は主に関東方面から春にきている。年間約100万人という数字が京都市による発表だが、この数字その100万人をなんとかキープしている。

加茂川館創業が大正元年で100年ちょっと経っている。修学旅行はずっと受けており、今もわれわれの経営のベースになっている。制度的に言うと50%強が修学旅行で、それにプラスして一般のお客さまとインバウンドでどれだけ上積みできるかというのが今の収益構造になっている。

小池 長崎は被爆地ということもあり、平和学習を目的に修学旅行が訪れる。出身など鎖国時代の歴史・文化もあり、コンパクトな街で目玉研修には向いている。教育旅行のデスティネーションとして最盛期は平成2年に約91万人が来ていたが、平成10年頃に40万人を切るぐらいになって、そこから少し復活して、今40万人前ぐらいだ。

中学校の場合は、長崎で平和学習を実施し、それに松浦などの地域での民泊・漁業体験、農業体験を始めるパターンが多い。民泊・泊、長崎・泊というのが一般的に行われている。当館も3分の1が修学旅行の売り上げだ。春は関西の中学校がメイン、秋は関東など関西以外の高校がメインだ。

〇昔と変わってきたことあると思う。近年の修学旅行に関して何か気づくことは。

斉須 スキー修学旅行が以前は盛んだったが、今徐々に減りつつある。それは先生にスキーの認識がなくなってきたいるから。昔は大学では体育の授業でスキーは必須だったが、今、選択になった。それとスキー離れもしている。スキー修学旅行では先生たちが格好良スキーをしているところを生徒に見せたいと思っているので、スキー経験のない先生は敬遠したがるのではない。スキー場はバスで来る修学旅行が多いので費用的な理由もあって、スキー修学旅行が減りつつある。

ただ言えることは、スキーは楽しいので、それなりに常連校がある。生徒たちも非常に喜んで帰る。

地域・施設として力を入れていること

篠下氏 京都府の部会で献立講習会

小林氏 行政と学校訪問キャラバン

小池氏 荷物の部屋入れをサービス

斉須氏 ビュッフェでアレルギー対応

小池氏

んがイスラム人、お母さんが日本人といったケースがある。宗教的な理由でこの子の食事は豚肉などを止めてもらいたいといった要望も出てくる。

誰々がこの部屋にということに情報としての価値があるとは思えないが、個人情報の管理がうるさくなったこともあって、その取り扱いに関しては、帰宅して食中毒の発生はもうありえないという目になってから、シユレクターで処理している。

小池 東京の観光部の方で修学旅行のデスティネーションとしての東京という感覚がほとんどない。頭の中にあるのはオリンピックとインバウンドだ。東京の修学旅行で泊ったものが1泊に減っている状況で、東京の修学旅行を増やすために何らかのことをやってほしい。

篠下 独自の、学校が喜ぶので、荷物の部屋入れを行っている。しかし、なぜ外国人が重い荷物を持って長い距離を歩いて旅行しているのに、修学旅行では軽く持てる荷物まで宅配便で学校から送ってくるのか。帰る時も手ぶら。ある程度肉体的な苦痛もあっての旅だ。あまりにも子供を甘やかしてダメにしているのではない。

斉須 うちのほうも悩むのはアレルギーの問題だ。学校との話し合いを経て、うちは全部ユッフエスタイルに変えて好きなの料理を取れるようにした。同時に料理のプレートを置き、そこに全ての材料が入っているか書いた。当然アレルギーの手は自分のためなのだから分かってはいるわけだから、選べるはずだ。本当に厳しい子には献立を学校の方からもらってそれを作る。

小池 スキー修学旅行に関しては、基本的にはスキー板からウェアまで全てレンタルし、インストラクターがスキー器具の調整も全部やる。スキー場とホテルとインストラクターが一体となっていて、そういうことで、それが非常に評判が良い。

先生たちにゆっくりしてもらってラウンジも作っている。それを職員室代わりとして先生に使ってもらおうというのが一つのうちのポイントだ。

〇充実した受け入れを行うための課題は何でしょう。

小池 長崎という街は県庁所在地で唯一と言っているほど人口が減っている。観光交流人口の増加は町の課題で真っ先に進めなければいけない。だが、町全体の観光への認識が薄い。教育旅行に関しても、長崎で300万人泊まるころの30万人、10人に1人とかかなりシェアが大きい。行政の理解はあるのだが、その重要性を町の人に知ってもらうことが必要だ。

長崎は原爆の被爆地で平和を発信する義務がある。若い子供たちに来てもらって平和学習をしなければいけない。沖縄でも広島でも同じだが、語り部さんが少ない中でポスト語の部というか、平和学習をどう発信していくのかというのがわれわれの一つの課題になっている。

当館としては、アレルギーなどは、できるだけ前段階で準備し、精度の高い対応をしている。担当者のスキルも含めながら経営体制の強化も図っている。

小池 東京は投資ファンドの思惑なのか大手の遊休不動産を抱えた大企業の思惑なのかは別

として、「東京オリンピックが来る」、安倍政権で「インバウンドが4千万人だ、6千万人だ」と景気の話がポロリと出てしまった。地に足の着いた形で東京に泊まって東京で何かしら楽しんで時間を使ってもらおうということが欠落している。

東京はわれわれ生活者の目線で見ても旅行や移動がしにくい面が多々ある。例えば地下鉄が都営と営団の2系統ある。都内の人でさえどこで乗り換えたらいいのか分からない。

〇近代的なものや古いものが混在している点が一つの面白さだから、われわれが何か東京の特別なものをピックアップしてPRするより、来る人たちが事前にネットなどでさまざまな媒体で見ても旅行や移動がしにくいのが一番いいのではないかと。

斉須 山なのでは？。連泊の修学旅行で来て、山歩きもできないという状態が今年もその。ホテルから10分足らずの所に歴史の展示を見たり、講演を聞いたりすることができ、素晴らしいホールがある。そこに行こうという話になった。

しかし、修学旅行のバス代が全部決まられているから、手配したバスを動かすことができない。生徒たちをそこに運ぶ手立てがない。最終的に話し合いをして私たちが負担して地元のバスを動かしたことがある。雨天の時の対策が課題の一つだ。

〇今後は東京のホテルに泊まったりするので、バス付きの部屋を用意してほしいという要望を受けようになった。本当は、大浴場に入ってもらえれば良いのだが、いよいよそういう時代が来たかと思う。当館も半分以上がバス付きの部屋だが、今後増やすことも考えなければ。

篠下 まず行政のことだが、京都も年に約6回いろいろなキャラバンに行っている。しかしここ数年、行政の予算が出ず、われわれの持ち出しになり、年に2回ぐらいしか行政と一緒に回れない。インバウンドの伸びがすごいので教育旅行の方にはなかなか予算がつかない。

京都に観光客が来てくれる理由は、修学旅行で初めて京都に来ることだから。その第一印象があるからこそ、リピーターとして年に何回か来てくれる。それを行政にも言うが、なかなか理解されない。外国人ばかりに目を向けていたら痛い目に遭う。

当館としては、充実した受け入れをするために、できるだけ情報を発信していくということとで修学旅行にくる3カ月前にウエルカムレターと一緒に加茂川館のご利用の注意点を学校に送っている。修学旅行のしおりにわれわれの要望を入れてもらえるようにしている。



鳳明館 小池氏



志賀パレスホテル 斉須氏